
ネガティブな春

紅屋の仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガティブな春

【Nコード】

N3379R

【作者名】

紅屋の仁

【あらすじ】

最後に会ったのは、二ヶ月前。最後に電話があったのは、一ヶ月前。

最後にメールがきたのは、二週間前。そのメールには「しばらく会えない」とだけ。このまま、終わってしまうのでしょうか。ネガティブな女性の恋物語。

前編（前書き）

まったくの初心者です。至らない点も多々あるかと思いますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

前編

最後に会ったのは、二ヶ月前

最後に電話があったのは、一ヶ月前

最後にメールがきたのは、二週間前

そのメールには

「しばらく会えない」だけ

これが世でいう自然消滅か。

最後のメールを眺めながら思う。

いつかはこうなると覚悟していたはずだったのに、二年という月日のせいで緩んでしまったらしい。

この二年間にあなたから届いた、短くて簡潔なメールを何度も読み返してる。

あなたと私が繋がっていたという確かな証を求めて。

今思い返してみても、私と彼には本当に共通点がない。

近所のスーパーの店員である私と大手企業の社員である彼。

現場でのマーケティングの調査とやらが私の働いているスーパーで行われなければ、一生会うことはなかったに違いない。

びしっとスーツを着こなして挨拶する彼の目が鋭くて、何だか怖かったのを今でも覚えてる。

その彼の対応をまかせられたのが、何故か私だったのだ。

「現場の意見が聞きたい」という彼の要望で、何度か二人で話した。時には、一緒に昼食を食べに外に出たこともある。でも、いつものまにか話がずれてしまい、最後は雑談になってた。

やはり、私では彼の役には立てないと何度も店長に訴えたのに「君じゃなきゃダメなんだぜ☆」と親指を立てて言われた。あなたはいつも楽しそうですね・・・（脱力）。

初めは緊張していた私も、話し上手な彼のおかげで、だんだん自然に会話できるようになっていった。

少し低めの彼の声は、聞いていて心地よかった。

調査とやらが終わっても、彼はたびたびスーパーを訪れた。

「現場の声を聞く」という大儀名文のために。内容はあいかわらず、雑談だったけど。

パートの女性にも大人気で、いつも残りものを押し付けられてた。

そんな、ある日。

私が、帰ろうとしている時に彼がやってきた。

「あ、もう帰宅されるんですね。」

「大丈夫ですよ。特にこの後、予定もないですし。」
自分で言ってて悲しいですが。

「しかし・・・」

そんな、私たちのやりとりを見ていた店長が、何の前触れもなく爆弾を落とした。

「じゃ、彼に送ってもらっちゃいな☆」

いや、ウインクされてもですね・・・

「そんなことをして頂くわけには・・・」

と丁重にお断りしようとした私の言葉をさえぎり、彼は言った。

「あなたさえよければ、お送りさせて下さい。」

と真剣な顔して言われて断れるはずないじゃないですか・・・。

その日から、時々彼が送ってくれるようになった。
送るだけじゃなく、時間が許せばドライブや食事にも連れていくてくれた。

この頃になると、もしかして…と考えてしまうこともあったけど、ありえないと自分に言い聞かせていた。

のに

私が住んでるアパートの前に停まった車の中で、私の両手を握り彼は言った。

「佐竹はるさん、俺と結婚を前提に付き合ってください。」と

何度、こんな場面を想像しただろう。

でも、これは間違いなく現実だと握られた手の暖かさが告げてくる。その上、「結婚を前提に」って言いましたよね!?

そんなこと、想像の中でも言われたことありません!

完全に許容量を超えた私の頭の中は真っ白になった。

握られた両手は痛くはないけど、力強くて逃げ出すことはできない。それどころか、真摯な視線から目をそらすことさえ許されない。

彼の目は、嘘もごまかしも拒否している。

あの時の私は、彼の目に操られていたんじゃないかと今でも思う。

いや、本当に。

頭で考えることなく、私の唇から

「よ、よろしく願いします・・・」

とぼやきのような音量の言葉が出てきた。

や、ちょっと待って！

今、なにを言った私！？

今度は自分の言った言葉で混乱する私をよそに

彼はほっとしたように息をはいた。

あの、今の発言はですねっ

私の身体に住み着いている何者かが勝手に言ったんです！！

という頭の悪い言い訳が口から飛び出そうになったけど

「よかった・・・これから、よろしくね。」

の一言で撃沈された。

今年で21歳になる私の恋愛経験は皆無で、間違いなく付き合いや

すい相手ではなかっただろうに彼はゆっくりと私に合わせて行動してくれた。

初めて抱きしめられた時は、腰が抜けた。

初めてキスされた時は、夜眠れなかった。

初めて彼の家に泊まった時は、恥ずかしくて死ねるんじゃないかと思った。

でも、嫌じゃなかった。

怖くもなかった。

相手が彼だったから。

好き、だったから。

終わってしまうのかな、こんな形で。

いつのまにか溢れだした涙で視界がにじむ。

迷惑なんじゃないかと思って私からは、ほとんど連絡したことはほとんどなかった。

いつもの私なら、間違いなくここであきらめる。

でも

これで終わりはいいやだ。

一回だけ悪あがきを・・・してみよう。

携帯を握った。

その時

着信がなった。

反射的に出ると、懐かしいとさえ感じてしまう彼の低い声がした。

「話しがしたい。」

さよならの？

心の中で誰かが言う。

ほら、求めるから傷つくんだよ。

失うってわかってるくせに、さ。

前編（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました！

後編（前書き）

後編です。

後編

少しでもほめてもらいたくて、一生懸命勉強した。

少しでも役に立ちたくて、家事も覚えた。

少しでも楽になってほしくて、高校に入学したら絶対にアルバイトしようと決めていた。

大切だった。

大事だった。

ずっと側にいてくれると思ってた。

でも、いなくなった。

私じゃない人を選んだから。

私の何がダメだったの————お母さん

待ち合わせの場所は、初めて二人で食事に行った喫茶店。
家からはちょっと遠いけど、歩いていこうと決めた。

「彼女」でいられる時間が少しでも長く続けばいいと。

なんて、往生際が悪いのだろう。

見慣れた町を歩きながら、自嘲した。

母が男の人と出て行ってから、人と距離を置いてきた。

ただ、別れにおびえて。

誰といっても「いつか、あなたも離れていくんでしょう?」と心のどこかでいつも思ってた。

出会う前から、別れを覚悟してた。

はずだった。

「はずだったのになあ・・・。」

また、視界がにじみ始めた。

一晩中泣いたのに、まだ泣けるのか。

こぼれないように上を向けば、母がいなくなった日と同じように雲一つない青空だった。

深く息を吸って、喫茶店のドアを開ければ、あの日と同じ席に彼が

いた。

思えば、こういった場所で待ち合わせるのは初めてかも知れない。いつも、彼が私の家に迎えにきてくれたから。

もう迎えに来る必要さえないよね。

もしかしたら彼はずっと前から、こんな風に行動で私に別れを示していたのかもしれない。

鈍い私が気づかなかっただけで。

さよならの下準備を。

私が覚悟できるように。

優しいね。

でも、いらないよ。

そんな優しさは。

「久しぶりだね、正隆さん。まさたか」

ちゃんと微笑んだつもりだったけど、自信はない。

「ああ、久しぶり。はる」

いつもより声が低い？

疲れてるのかな・・・。

「はる・・・少し痩せたんじゃないか？」

眉をひそめ、私の顔に触れようと彼が手を伸ばしてきた。

いや。

もう、私に触れないで。

そんな心配そうな顔しないで。

拒絶の意味を込めて、子どもがいやいやするように首をふった。

「大丈夫だよ。それより話して何？」

優しいふりはいらさない。

早くキレイに終わらせて。

「ああ・・・そうだな・・・」

彼が姿勢を正した。

そして、告白された時のように私の目をとらえて

「はる・・・俺と・・・」

彼は母より誠実だ。

メールでも電話でもなく、こうして私にちゃんと別れをくれる。
私も、精一杯それに答えよう。

下唇を噛み、手に力を込めた。

「結婚してほしい。」

「・・・うん。正隆さんがそういうなら・・・。」

結婚しよう・・・。

ん？

結婚！？

「け、結婚っ！？」

思わず叫んだ。

周りに注目されているのに気づき、縮こまる。

「け、結婚って・・・。わ、別れるんじゃない？？」

ダイナミックな言い間違いではないだろうか。

「別れる？はるが泣いて叫んでもそれだけは絶対に認めない。」

何かすごいことをサラっと言ったよ、この人！

今、起こっていることに頭が全くついていかない。
にも関わらず、彼は立ち上がり・・・

「さて、指輪を買いに行こう。」

と言った。ちょ・・・っ！

「まだ、返事してないっ！」

「さっき、うんって言ったじゃないか。」

「あれはっ！」

別れようって言われたと思ったからであってですね！
もごもごしている私を見て、正隆さんは言った。

「ふう。しょうがないな、はるは。」

と改めて席に座る。

再び向かいあった私たち。

も、もしかしてあきれられた・・・？
違うの！嫌とかじゃなくて！！

あわてて言葉を探す私の両手を彼は握った。
いつかと同じように。

そして、私の視線をからめとる。

いつかと同じように。

そして彼は言った。

「佐竹はるさん、俺と結婚して下さい。」

私は答えた。

今度は自分の意思で。

いつかと同じ言葉を。

「よ、よろしく願いします。」

今度は何か涙もでてきたけども。

さりげなく私たちの会話を聞いていたお客さんたちの拍手に見送られながら喫茶店を後にし、一生来ないだろうと思っていた高級そうな宝石店で指輪を買った。

値段が書いてないところが、よけいに怖かった。

いくらしたのか後から聞いても笑って教えてくれなかったけど。

そのまま連れて行かれた先は、彼のマンションで。

これでやっと落ち着けると思ったら、ドアを開けるなり押し込まれ、玄関で強く抱きしめられた。

「っ!?! 正隆さんっ!?!」

こんなに乱暴に扱われたことは一度もなかったので、恐怖心から彼

を押しのけようとした。
けど、

「はる・・・会いたかった・・・。」

かすれた声で切なげに言われ、私は抵抗をやめた。

足早にベッドに運ばれ、いつもより余裕のない彼の全てを受け入れた。
た。

やっとともに会話できるようになったのは、それから何時間も経った後だった。

ひっかかったことを何とか言葉にする。

「あの：何でこんなに連絡なかったの：？」

私の言葉を聞いた彼は、突然起き上がり、私の両肩を掴んだ。

「聞いてくれるか、はる！ 災難続きだったこの2ヶ月を：。」

へ？

うん、本当に壮絶だった。

まず、上司から仕事を丸投げされ、さらに部下の尻拭いに駆り出されたそうだ。

残業だけでなく、ほとんど休日返上で働いていたらしい。

それがやっと片付いたのが、二週間前で。

疲れた体をひきずって出社したら突然、病気になった人の変わりに海外への主張を命じられ、向こうに到着した途端、携帯が故障・・・。

普通に聞くとありえないと思うけど、普段あまり感情を表に出さない彼が、時々声を荒げながら話す様子を見る限り嘘ではないだろう。嘘だったほうがよかったとも思うけど・・・。

最後のメールの「しばらく会えない。」は飛行機に乗る前に空港から送ってくれたらしい。

「大変だったね・・・。」

心から思うよ・・・。

「何がつらかったって、はるに会えないことが一番つらかった・・・。

何度、真夜中の襲いに行こうと思ったか・・・。」

おそ、襲うっ!?

でも・・・。

「襲ってもいいから会いに来てほしかったな・・・。」

ポツリとつぶやいた言葉は、まぎれもなく本音。

だけど・・・。

な、なんて恥ずかしいことを！

「あのねっ」

今の発言はですねっ！？

私の身体に住み着いている・・・（以下省略）

「わかった。これからは、ガンガン襲うことにする。」
真顔で、そんなこと言わないでください！

照れくさいやら恥ずかしいやらで、私はうつむいた。
そんな私を彼が呼ぶ。

「はる。」

おずおずと顔をあげた私に彼は言った。

「ずっと一緒にいろ。」

さよならの変わりに、絆をくれたあなた。

私にできることなんて、ほとんどないけれど

今度は、握られた手をちゃんと握り返すよ。

私の全てで、あなたをつなぎとめ

・ ・ ・ られるように頑張ろう。

死が二人をわかつまで

「よろしくお願いします！」

後編（後書き）

最後まで、お読み頂きありがとうございました！次回は、正隆さん視点を書こうかと思っております。彼と愉快的仲間たち（？）が、はるちゃんをおとすために（裏で）頑張る話です。よろしければ、読んでやって下さい。

俺の春 下準備編（前書き）

正隆さん視点です。一旦ここで話をきららせて頂きます。

俺の春 下準備編

最後に会ったのは、二ヶ月前

最後に電話したのは、一ヶ月前

最後にメールを送ったのは、二週間前

そろそろ限界だ。

ネガティブな彼女のことだから、これが自然消滅か・・・とか考えて勝手に別れたことにしかねない。

そんなことありえないのに。

役に立たない電話を握り締めながら思う。

例え何度この繋がりが途切れても、はるだけは絶対に手放さない。

— 2年前 —

貴重な休日だというのに、俺はスーツをきっちり着込んで、とあるスーパールの前に立っていた。

彼女を手に入れる、その為に。

「さて、行きますか。」

彼女を手に入れると決めた日から、俺はどうやって逃げられずに彼女に接近できるだろうと考えていた。

彼女は、押したら押した分だけ引くタイプ・・・というより押す前から安全な所まで引いてるタイプだ。
歩み寄ることさえ、彼女は許さない。

ならば、どうするか。

逃げられないように周りを囲んでしまえばいい。

「はじめまして。尾形 まさたか 正隆と申します。」

目の前の真っ赤なドレスシャツを着たオールバックで、やたら顔の濃い男性に名刺を差し出した。

・・・一見すると、バラクワエて社交ダンスしてそうな人だが、まぎれもなくこの店の店長である。

「うーん？ うちの個人経営のスーパーだからおたくみたいな大手のやり方とは合わないんだけどね☆」

「いえ、今日は個人的にご検討頂きたい案件がございました。」

「個人的に？」

困惑した表情になる。まあ、当然だな。

「はい。実は、ここで働いている佐竹はるさんとお近づきになりたいのですが、協力して頂きませんか。」

普通こんなことは職場の人間ではなく、彼女の友だちとかにお願いするべきなんだろうが、彼女とこのスーパールの繋がりはとても深い。長く働いていることもあるだろうが、この店長やパートのおばちゃん達には娘のように可愛がられているのだ。彼女も、この人達からは逃げたりしない。何としてでも、味方になってもらいたかった。理解を得るため、続けて言葉を重ねる。

「はるさんの性格から考えて、私が強引に近づこうとすれば、はるさんは萎縮して逃げてしまうと思うんです。」

「だから、私たちに仲介人になってもらいたいと？」

その通り。

「はい。どこぞの馬の骨に突然かつさらわれるよりいいかと。」

「なるほどねえ・・・☆それに、職場に手をまわす位本気なんだね★」

「もちろんです。例え、こちらに断られたとしても、また別の方法で俺は彼女に近づきます。」

ええ、絶対に。

「ふーん・・・と彼は言ってるんだけど皆さんどう思う？」

と言いながら事務所のドアを手前に引くと、5人のおばちゃんがな

だれ込んできた。

あんたら、仕事はどうした。

5人のおばちゃんは、当たり前のように俺を取り囲むようにそれぞれ席についた。

おばちゃんの一人が言う。

「はるちゃんは、私たちの娘も同然。そうやすやすと近づけさせないわよ！」

別のおばちゃんが言う。

「それに、とても繊細な子よ。あなた、その変ちゃんとわかってるの？」

さらに別のおばちゃんは続ける。

「私たちが、はるちゃんにふさわしいか見定めてあげるわ！」

そして、店長がまとめる。

「・・・というわけだから、ちょっと付き合ってくれる？」

聞くまでもない。

こうなるだろうと予測して、スーツを着てきたのだ。

さすがに、おばちゃん5人は予想外だったけどな・・・。

「皆さんが納得されるまで、いくらでもどうぞ。」

それから、6方向からの質問の嵐だった。

学歴や年収、家族構成から始まり、家事はどれくらいできるのかとか子どもについてどう思うのかなど気が早すぎるだろうという内容の質問も飛び出し、果ては歴代の彼女と別れた理由はなんだったのかとかちゃんとその彼女たちとはきれてるのかとかまで聞かれた。

お、怖るべし、おばちゃんパワー・・・。

1時間にも及ぶ怒涛の質問攻めを経て、皆さんが出した答えは・・・

「「合格っ☆!!」「」」

その言葉を聞いて、机の下で小さく拳を握った。

というか、ここまで聞き出されて却下だったら、暴れ出すな、絶対・・。

でも、おかげで心強い協力者たちを得た。

その後、今後について少し話し合い、俺が会社の調査と称してこのスーパーに入らせてもらうことになった。仕事であれば彼女は、逃げずにちゃんと俺と向き合ってくれるだろう。

出会いの下準備は済んだ。

さあ、君を手に入れよう。

今日の教訓..おばちゃんたちは、絶対に敵にまわしてはいけない。

俺の春 下準備編（後書き）

読んで頂きありがとうございました！正隆さんは、こんな人でした。
出会い編に続きます。

俺の春 出会い編（前書き）

出会い編です。長くなってしまいました…。

俺の春 出会い編

愚かだと思った。

だが・・・

それ以上に愛しくて、抱きしめたくてしよがなかった。

「というわけで、今日からうちの店を調査する尾形☆正隆さんだっ！みんな、仲良くやってくれるかな★??」

そう言って、店長はマイクのように握った右手を店員さんたちに向けた。

もちろん、誰も「いいとも！」とは返さなかった。

朝から、そのテンションを求められてもな・・・。

微妙な空気から抜け出すように、俺は一步前に出た。

「尾形正隆と申します。短い期間ではありますが、よろしくお願います。なるべく皆さんの邪魔にならないように行動しますので、どうかご協力下さい。」

言い終えた後に一礼し、顔をあげるとはると目があった。すぐにそらされてしまったが。

少しがっかりしつつ、ここまで近づけたことに喜びを覚える。

無論、この距離で満足したりしない。

目指すのは、誰よりも君に近い場所なのだから。

特にめげた様子もなく、店長は話します。

「さて☆それじゃ、尾形くんのお手伝いをしてくれる人を決めよう

★うーん・・・誰がいいかな◎」

誰にしようかなと一人ひとり指をさしていく。

いちいち芝居がかってんな、この人。

「木野さんは返品入力があるし、山田さんには発注してもらわなきゃだし・・・三木さんは・・・腰痛だし☆」

大丈夫か？三木さん。

「という訳でっ！君に決めたっっ！！」

そう、決めてたんだ。ずっと前から・・・。

「佐竹はるさんっ☆尾形くんを頼む！！今日から君と彼は、一蓮托生だっ！！」

・・・店長、さすがにそれは言いすぎだろ・・・。

朝礼の後、調査面接と称して事務所の中で、はると初めて向き合った。

「すみません。面倒なことを頼んでしまって・・・。ですが、どうしても実際にお客様と接している方の意見が必要なのです・・・。」
言葉にいつもの切れがない。どうやら、ガラにもなく俺は緊張しているらしい。

「い、いえ……。でも私なんか・・・役に立てるでしょうか？」
下を向きながら話す彼女を少しでも安心させたくて、言葉を探す。

「もちろん。店長はあなたを信頼して任せられたんですよ。」

店長と聞いて、彼女が顔をあげた。

「・・・そうですね……。私にできることがあれば何でも言っ
て下さい。」

店長は彼女の大切な人の一人だ。わかってはいたが・・・妬けるなあ。

「では、改めて。尾形正隆です。今日からよろしくお願いします。」

「あっ……えっと初めまして……っ。佐竹はるですっ！よろしくお願いしますっ！」

初めまして……。ねえ……。やっぱり、覚えてなかったか……。

一ヶ月前の、あの出会いを。

―数ヶ月前―

「は？月曜日の女？」

同僚である恒藤の話に、俺は素っ気なく対応した。

「お前は曜日ごとに違う女がいるのか。なかなかやるな。」

「俺を何だと思ってるのかな、尾形くんは。ぜんぜん違うよっ！ほら、いつも通る公園の近くにでかいマンションがあるだろ？」

「ああ、確かに。」

「月曜日にだけ、公園のベンチに座ってそのマンションをずっと見てる女の子がいるんだよ。」

話の意図がわからず、俺は首をかしげた。

「それがどうした？」

「何か気にならねえか？何で月曜日だけなのかとか。何であのマンション見てるのかとかさ。しかもさ、帰りしにもまだいんの、その子。一日中だよ？おかしくない？？」

「誰かを待ってるのかもしれないだろ。」

俺は適当に返した。

「んゝ・・・あれは、誰かを待ってるっていうより・・・ああ！もう！！」

言葉を濁し、恒藤は突然立ち上がった。

「説明すんのも面倒だ！ちょうど月曜日だし、今から見に行くぞっ！」

「はあ？俺は別に・・・。」

興味ないと続ける前に、恒藤は俺の腕を強引にひっぱりだした。

そして、初めて俺は君を見た。

「な。いるだろ。」

自分の話を立証できて満足なのか、得意げに恒藤は言った。

だが、俺は彼の話聞いてなかった。視線の先にいる彼女に釘づけになっていたから。

細身な身体で髪を一つくりにした若い女性が、公園のベンチに座り、マンションの入り口付近をじっと見つめている。
どこにでもいそうな女性だった。

なのに・・・

彼女は・・・

彼女のまわっている雰囲気は・・・「誰かを待っている」というより

「・・・捨て犬だ・・・。」

そう、一時は誰かに求められたものの、人の勝手な都合で捨てられた犬のようだった。

一度、愛でられた記憶を忘れられず、飼い主が迎えに来るのをずっと待ってるような・・・。

「ああ、そんな感じだな。な？ 気になるだろう？」

俺は答えなかった。そして、彼女に背を向け歩きだした。

「おいつ、尾形！」

恒藤の声にも足は止まらなかった。俺は一体どうしたのだろう。いつも、ほとんど波立つことのない感情が暴れて全くとまらない。混乱する自分に対応することができず、俺はその場所から逃げ出した。

その日から、俺は月曜日だけ通勤する道を変え、彼女を遠くから見るようになった。

何でこんなに彼女が気になるのかは考えないまま。

月曜になると足は自然とあの公園に向いた。彼女を見たら、訳のわからない感情に苛まれるとわかっていても、どうしてもやめられなかった。

何の変化もないまま、月日だけが流れていった。

その月曜日も、俺は見ているだけで何も起こらないはずだった。

そう、君が倒れるまでは。

その日は祝日で、会社は休みだというのに俺は公園に来ていた。自分の行動のおかしさを、ちゃんと頭では理解できるのに家にいても全く落ち着かない。

そして、俺はあきらめ自分におもうがままに行動することを許した。

彼女はいつものベンチに座ってた。

今日は祝日だから、時間制限はない。

家から持ってきた本を片手に俺は彼女が見える位置にあるベンチに座った。

1時間ほどたった時、突然彼女が崩れ落ちるようにベンチに横たわった。

俺は、慌てて彼女に駆け寄る。今まで一切近寄ろうとはしなかったくせに。

「どうしました？大丈夫ですか？？」

返事はなかった。

呼吸が乱れ、顔が異常に赤い。ためらいがちに額に触れれば、ありえないぐらい熱い。

くそっ、もっと早く気づいていればっ！

とりあえず、救急車を呼ぼうと電話を取り出そうとした俺に声がかかった。

「にいちゃん、その子、うちに連れてきい！」

振り返ると、小柄なおばあさんがいた。

「ほら、ぼおつとせんと早く!!」

そのおばあさんの勢いに負け、俺はその指示にしたがった。

抱き上げた彼女の体は、とても軽かった。

おばあさんの家は公園の目の前で、古い商店のような佇まいだった。

「ここに、ゆっくり寝かせて。」

言われるがまま、ふとんに彼女を寝かせた。

それから、おばあさんは驚くほどテキパキ動き、家に連れてきて1

5分ほどで彼女の顔色が少しよくなった。

一段落した頃合を見計らって声をかける。

「ありがとうございます。俺一人じゃここまで迅速に対応できませんでした。」

おばあさんは少し笑って

「かまわへんよ。この子とは知りあいやしね。」

「お知り合いだったんですか。」

「そおや。この子はな、今マンションが立つ前に、あの場所にあったアパートに住んでた子やから。ご近所さんのよしみでな。」

あそこに住んでたのか。

「そうでしたか。」

「あの子にもな、何度も言うたんよ。もう待つのはやめって。」

その言葉に俺の感情が、またざわめきだす。

「彼女は誰かを待っていたんですね……。」

「そおや。この子は6年前からずっと母親を待ってるんよ。」

「母親……？」

「男と逃げた母親が最後に言うた「月曜日に帰ってくる。」という言葉
葉を信じてな。」

そんなっ！

「それで、6年間ずっとですかっ!？」

「そおや。ほんまにあほな子やろ。」

おばあさんの彼女を見つめる目は、すこしうるんでいた。

「何度やめるように言うても、「もし、お母さんが帰ってきた時、家なくなつて困るだろうから。」って全く聞かへんのや。」

「ほんまにあほな子や。」そう言って、おばあさんは水をかえにいった。

愚かだ。

愚かだよ、お前は。

普通、もう帰ってこないってわかるだろ。

なのに、なんでそんな自分を捨てたヤツずっと待ってるんだよ。

ありえないだろ。

全く理解できない。

なのに

なんで

こんなにも

「・・・愛しい・・・っ。」

どうしようもないくらい、お前が愛しい。

今すぐ、抱きしめて二度と離したくない。

お前が望むなら何だってしてやるから。

だから・・・

その時、彼女が目を開けた。まだ、視界がはっきりしていないのだろう。俺の顔を見て

「お・・・かあ・・・さん・・・？」

と言った。

俺は微笑み言った。

「もう大丈夫。君を一人にはしないよ。」

そっと乱れた髪をなでる俺を見ながら彼女はたどたどしく話す。

「・・・ずっと・・・一緒・・・？」

「ああ、ずっと一緒だ。」
お前が俺を選ぶなら。

「・・・そう・・・。」
と嬉しそうに微笑み彼女は目を閉じた。

その寝顔に俺はゆっくり話しかける。

「誰よりもお前を愛し、誰よりも大切にする。」

だから、誰よりも俺を求めろ。

そうすれば、永久に俺はお前を愛するから。」

安らかに眠る顔を優しく撫ぜ、俺は立ち上がった。
ここで、俺にできることはもうない。

「おや、帰るのかい？」とおばあさんに声をかけられる。

「はい。彼女のことよろしくお願いします。」

「頼まれるまでもないよ。元気になるまで、この家からは出さない

さ。」

「ええ……。あ、そうだ彼女の名前を教えて頂けませんか。」

「ん？ああ、佐竹はるだよ。」

「佐竹はるさん……ですか。ありがとうございます。それでは……。」

「ちよい待ちな。あんたの名前は？」

「名乗るほどのものではありませんので、失礼します。」
「と言って俺は歩きだした。」

そう、いつかちゃんと彼女の前で名乗る日が来る。それまで。

「あっ、ちょっと！」

それから、俺は使えるものは何でも使ってはるの情報を手に入れた。
はるを完全に手に入れるために。

恋愛に関して俺は自分はドライだと思っていたんだが、どうやら違
ったらしい。

独占欲も執着心も人一倍だ。

初めてはるを見た時も、俺以外の人間を求めているはるに苛立ち、は
るに求められている人間に嫉妬したにすぎない。
ガキくさいなあ……。俺。

「あのっ！」

ん？

「あの・・・ずっと考え込まれてるようですが、どうかしましたか・
・・。」

ああ、そうだ。今は、はると面談中だった。

まあ、あんな状態で会って、俺を覚えてるはずないよなあ。
しょうがないか。

「いえ、はるって印象的なお名前だなと思って。」

「え・・・？あ、母がつけてくれたんです。春みたいに暖かくて、
みんなに愛される子になってほしいって・・・それで・・・。」
どんどん声が小さくなり、顔は下を向いていく。

はる、お前がまだ母親を求めているのなら、俺はその気持ちごとお
前を受け入れる。

「なるほど。素敵なお母さんですね。」

その言葉を聞いて、はるはパッと顔をあげて、

「はいっ！」

と笑顔で言った。

過去はどうしても変えられない。

でも、未来なら割と自由にいじれる。

ゆっくり、時間をかけて近づいていこう。

距離がなくなる、その日を夢見て。

今日の教訓..おばあちゃんを侮るな。

俺の春 出会い編（後書き）

読んで頂きありがとうございました。次回は接近編です。正隆さんと愉快な仲間たちが裏で暗躍します。よければ次回も、お読み下さい。

俺の春 接近編（前書き）

気になるあの子に接近しましょう。

俺の春 接近編

ゆっくり、ゆっくり

君に近づいていく

初対面を果たした後から、俺はずっと調査の称して常にはるの側に陣取り、業務の話を少しづつ意図を持ってづらしていき、はる自身のことを聞き出した。それを自分のせいだと感じたはるが、店長に何度も他の人に変えてほしいと言ったそうだが、無論それは認められない。

店長が言うように「君じゃなきゃダメ☆」なんだ。

店長とパートのおばちゃん達のフォローも、わざとらしくったり、棒読みだったりしたが、はるが迷っている時に後押ししてくれたり、俺とはるの話のきっかけになってくれたりして協力してくれた。

そのことには、深く感謝してる。

・・・してるんだが、はるの背後でにやけながら親指立てんのはやめてほしい。

店長なんかカンペに「もっと積極的に☆」とか書いて見せてくるし、おばちゃんファイブは隠れるつもりもないらしく、合唱の練習なのとか言ってる俺とはるの側でラブソングを5人で歌いだすしまつ。

あんたら本当にやりたい放題だな！

おぼちゃん達いわく、ムードをよくするためらしいが・・・スーパ
ーの中じゃ絶対無理だろ。

客はなぜか喜んでたけど。

そんな周りの協力もあり、はるとは自然に話せるようにはなったもの、親密とまではいいない関係のまま、調査期間は終了してしまった。

「これから、どうするの？」と店長に聞かれた俺は特に悩むことなく言った。

「これからも調査と称して出入りさせて頂きたいと思っています。」

「それはいいけど・・・。そろそろ進展したいよね☆」

「はい。ですが・・・。」

今、俺が強引に動けば逃げられかねない。

「そうだね・・・ここはやはり・・・『第1回二人のために世界はあるのっ☆大作戦っ』会議を開く必要があるよっ！！尾形くんっ★」

うわ、参加したくねっ・・・そんな名前の会議。

なんて俺が言ったとしても、聞き入れる人ではないので数日後に、事務所にて店長と俺とおぼちゃんファイブが参加する『第1回二人のために世界はあるのっ☆大作戦っ』会議なるものが開催された。

「というわけで、皆さん☆尾形さんとはるちゃんがもっと仲良くなる方法を考えてくれたまえ★」

店長、あなたはいつも楽しそうですね・・・。

そして、おばちゃんたちはノリノリで考え出した。

「そうねえ、やっぱり危機を乗り切ったら二人の中は急速に縮まるんじゃないかしら。」

危機・・・？

「ほら、エレベーターの中に閉じ込められたりとか。」

何か変な方向に・・・。

「確かに、そうね！二人で爆発物を解体する状況になるとかね！」

どんな状況だよ。

「解体しようとする手と手が触れ合って・・・。」

いや、そんな余裕絶対ないだろ。

「そして、彼は優しい嘘をついて彼女だけを逃がすのよ・・・。」

つまり、俺に死ねと言ってるんだろうか。

店長と俺を完全に無視して、どんどん妄想をヒートアップさせていくおばちゃん達をどう止めたらいいか悩んでいた俺に店長はサラリ

と言った。

「尾形くんさあ☆車で来てるんだよね？じゃはるちゃんを家まで送っちゃえばいいんじゃない★？」

そしたら二人つきりになれるし☆と言った店長に

「もっと早く言えよ！！」

と怒鳴りそうになるのを、俺はなんとか抑えた。

そんな『第1回二人のために・・・（以下略）』会議で決まった通り、俺ははるが帰宅する直前にスーパーに現れ、店長が俺にはるを送るよう促し、はるが否定する前に俺は送らせて下さいと真剣に頼んだ。

それから、時間が合うときは俺がはるの家まで送るようになった。

はるを車という密室に閉じ込めているのをいいことに俺は、少し強引にはるを食事やドライブに誘った。

二人でいる時間が長くなればなるほど別れがつらくて、このままさらってしまいたいと何度も思った。

はるをもっと独占したい。

ゆっくり近づいていくつもりだったのに・・・

もう限界だった。

そのことを店長に告げれば、彼は立ち上がり言った。

「よし☆緊急のラブ・ゲッチュー会議をひらくよっ！」

相談しといてなんですが、そんな会議にでたくないです。

すぐにおばちゃんファイブに召集がかけられ、事務所にいつものメンバーが集まった。

「皆さん・・・ついにこの日がやってきました・・・。尾形くんがはるちゃんに告白することを決めました！
彼とはるちゃんを見守ってきた我々の最後の務めとして告白が成功するような方法を考えましょう☆」

店長の言葉におばちゃんたちは騒ぎ出す。

「あら、やっとなね！」

「今まで長かったわ！」

「はるちゃんが絶対OKするような告白の仕方を考えてあげましょう！」

嫌な予感しかないな・・・。

「そうねえ、私だったら百万本のバラを差し出されながら告白されたいわ。」

匂いに酔いそうだな。

「私は、学校の屋上から告白されたい・・・。」

いや、俺もう会社員なんで。

「ダンスパーティーを王子様と抜け出して・・・」

俺は確実に平民です。

予想通り、あらぬ方向に走り始めたおばちゃんを俺はもう見てるしかなかった。

そんな俺に店長が声をかける。

「あんまり大掛かりなことするとはるちゃんが萎縮しちゃうから、普通に告白しちゃったら☆」

言ってることは、とても的確だが・・・

「なんで、もっと早く言ってくれないんですか？」
と俺は脱力しながら言った。

「だってえ、それじゃ楽しくないじゃない☆」

やっぱり、そんな理由だったか・・・。

疲れきった俺を見ながらクスクスと笑っていた店長は、次の瞬間フツと真顔になり俺に言った。

「尾形くん、はるちゃんは優しくて少し寂しがり屋ない子だ。はるちゃんをよろしく頼む。」

いつものように、ふざけたしゃべり方ではない真剣な声に、俺は姿勢を正し

「はい。」

と言った。

さあ、はる。俺の側においで。

店長のアドバイスに従い、いつものようにはるを送って行った俺は、はるのアパートの前で車を停め、はるがドアを開ける前に、逃げられないようにはるの手を握った。

そして

「佐竹はるさん、俺と結婚を前提に付き合ってください。」

と言った。

小細工なしの直球勝負。

俺としては、すぐ結婚してもいいのだが、はるは無理だろうな。

間違いなく混乱しているはるの目に俺は自分の視線全てを注いだ。

昔から人に目力があるといわれてきた。会社では、目だけで弱気な上司を黙らせることもあるくらいだ。

その目に力を入れ、はるを捉える。

はる、俺を受け入れろ。

ずっと一緒にいてやるから。

その無言の訴えが届いたのか、はるがとても小さい声で

「よ、よろしくお願いします・・・」

と言った。

その言葉に心の底から安堵した。

おぼちゃんたちからの情報や自分の印象で嫌われてないことはわかってきたが、それでもやっぱり不安だったのだ。

でも、やっと君を手に入れた。

まだ、混乱している彼女に止めをさす。

ここまでできて誰が逃がすか。

「よかった……。これから、よろしくね。」

そう、永遠に。

それからの日々は本当に幸せだった。

恋愛に慣れない彼女があたふたしている様子を楽しみつつ、ゆっくりとしかし確実に俺は彼女との距離を縮めていった。

初めて抱きしめたのは、夜景のきれいな展望台だった。

景色に見とれる彼女が愛しくて、思わずやってしまった。しばらく、抱きしめていると彼女が腰を抜かしてしまい、抱っこして車に運んだ。抱っこしながら、ニヤついていたのは言うまでもない。

初めてキスしたのは、車内で。「それじゃ。」と俺に言う彼女の唇を奪った。少し触れるだけのつもりだったのに、驚いて見開かれた彼女の目がゆっくり閉じられていくのを見て、理性がきれた。

舌を入れ、好き勝手に彼女の口をむさぼった。呼吸ができず必死で、はるが俺の胸を叩かなければ、間違いなく最後までいっただろう。

初めて結ばれたのは、俺の部屋。もちろん、はるの同意の上で。
ガチガチに緊張するはるをリラックスさせるため、少し酒を勧め、
なだめるように彼女を抱きしめながら背中をさすった。はるが少し
落ち着いた時に「・・・はる、いい？」と耳元で聞いた。小さくう
なずいた彼女を強く抱きしめ、はるをゆっくり愛していった。俺の
耳元ではるが俺の名前を呼んだ声は、きっと一生忘れない。

やっと

やっと、君との距離がゼロになった

そして

これからもずっとゼロのままдейよう

今日の教訓…店長は計り知れない人である。

俺の春 接近編（後書き）

読んで頂きありがとうございました。恐らく、次話で完結となります。

俺の春 春到来編（前書き）

とりあえず最終話です。春を先取り。

俺の春 春到来編

もうすぐ

暖かくて

愛しい

春が来る

悪い夢だと思いたい。

「ここは将来有望な若い社員にチャンスをあげようと思うんだ。」
上手いこと言ってるが、アンタは行き詰った計画を部下に丸投げしようとしているだけだろ。

「任せたよ、尾形くん。」

断る！とはいえない。

日本人だからではなく、仕事だから。

「やってみます。」

簡潔に言った。

「もちろん、部長にもご協力頂けるんですよ？」
断れないように目力を入れながら付け加える。

これで終わりだと思ふなよ。

「・・・も、もちろんだとも・・・。」

言ったな。せいぜい上手く使わせて頂こう。

「それでは。」

はぁ・・・忙しくなるな。また、はるに会えない。

はるの休みは不定期だから、カレンダー通りに休みとなる俺とは予定が合わず、会える時間は限られているのに・・・。

はると付き合い始めてから俺は言葉より行動を重視するようになった。

二年付き合った今でも、はるは何も言わない。

そして、求めない。

それでも本音が知りたくて、俺は必死ではるの行動から読み取ろうとする。

眠っている彼女から離れようとする、すぐるように俺の首にまわされる腕。

俺が帰ろうとすると、わずかに下がる目線。

その行動に込められた彼女の感情が、俺を安心させるのだ。

この思いは一方的ではないと。

それを確かめるためには、メールや電話ではなく彼女に直接会う必要があるのに・・・。

部長め・・・。隠してるが実は自分の歳の半分以下の歳の某アイドルの熱狂的なファンだってばらすぞ。

それからの数週間は、本当に働いていた記憶しかない。

休日も出勤し、体力と気力をすり減らす日々が続いた。

そして、やっと今後の見通しが立った時、それは走ってやってきた。

「先ばい・・・俺やっちゃいました・・・。」

何を？と聞く前に俺は本気で逃げ出したくなった。

・・・ああ・・・はるに会いたい・・・。

こうして今度は、後輩の尻拭いのために俺は走りまわった。

この頃になると、精神的に余裕がなくなり、それをはるにぶつけてしまうことを恐れて、電話もしなくなった。

はるとの繋がりは短いメールだけ。

本当にどうにかなりそうだった。

なのに・・・

「尾形くん、今日出張するはずだった荒木くんがインフルエンザになってしまった。突然で申し訳ないが君に彼の代わりに出張してもらいたい。」

帰ったら、絶対お払いに行こう。

急いで主張する準備を整え、空港に着き搭乗を待つ間にはるにメールを送った。だが、今の現状を説明するだけの時間はなく、内容は「しばらく会えない」とだけ。

出張先に着いたとたん携帯が壊れ、これが最後のメールになるとは、この時の俺は全く予想していなかった。時差から、はるに電話するのもためらわれ、はるに全く連絡できないまま二週間の出張を終えた。

究極に追い詰められたこの状況の中で、俺は決めた。

帰国したら、はるにプロポーズしよう。

誰にもわかつことができないはるとの絆を手に入れるんだ。

その決意が俺の精神をギリギリで保っていた。

二週間ぶりに帰ってきた自宅で俺を待っていたのは、50件以上の留守電。

もしかして、はるが・・・？

本当に必要な時以外はるから連絡してくることはない。

俺は期待し・・・そして、落ち込んだ。

その、ほとんどは店長とおばちゃんファイブからのものだったから。内容をまとめると「はるが日に日に落ち込んでいつて。お前なんかしたのか。はるを泣かす気か、こら。」という感じだった。最近の伝言なんか、ほとんど罵倒になってた。主におばちゃんファイブからの。

はるを不安にさせてしまったことを後悔しつつ、俺が連絡しないことではるが落ち込んでくれたことに悪いと思いつつ喜びも感じていた。

全く会えない日々。

俺だって不安だったんだ。

指が覚えてるはるの電話番号を押し、久しぶりにはるの声を聞いた。
ただ、それだけで満たされる自分がいる。
君なしではいられない。

いたくない。

願わくば、永遠に俺の側に。

「話しがしたい。」

二人の将来について。

会社に少し顔を出す必要があったので迎えには行けず、近所の喫茶店で待ち合わせた。

久々に会った彼女は、目に見えて緊張してた。

さらに、店長たちが心配するのも理解できるほど、彼女の様子は変わってた。

目の下のくま、ぎこちない笑顔、それに・・・

「はる・・・少し痩せたんじゃないか？」

顔に触れて確かめようとした俺の手を寄せ付けないように彼女は首を振った。

これは、確実に俺が別れ話をすると思ってるな。

「大丈夫だよ。それより話して何？」

はるの変わりように心が痛みつつ俺との別れを思って、ここまで追い詰められているはるがたまらなく愛しかった。

はる、俺は一生、君を手放したりしない。

「ああ・・・そうだな・・・」

姿勢を正し、はるを見据える。

「はる・・・俺と・・・」

はるが唇を噛んだ。覚悟できてるんだな。だが、その覚悟はいらない。

俺が欲しいのは、別の覚悟だ。

「結婚してほしい。」

「・・・うん。正隆さんがそういうなら・・・。」
とはるが言った。

決めてたセリフを言っただけなんだろうが、とりあえず同意したことに変わりはない。

言質はとった。

あとは攻めるのみ。

「け、結婚っ!？」

叫ぶ彼女に頷いてみせる。そう結婚です。

「け、結婚って・・・。わ、別れるんじゃない?」

それは、永久にありえない。

「別れる？はるが泣いて叫んでもそれだけは絶対に認めない。」

はるが混乱している様子を楽しみつつ、話を強引に進めていく。

「さて、指輪を買いに行こう。」

立ち上がり平然と言った俺に彼女は

「まだ、返事してないっ！」

と言った。

「さっき、うんって言ったじゃないか。」

俺との別れに対して言ったとわかっているが、別れを受け入れちゃった彼女に少しぐらい意地悪しても許されるだろう。

「あれはっ！」

はるをからかうのは、このへんで、やめところ。

「ふう。しょうがないな、はるは。」

と座りなおすと、あたふたしているはるの両手を握り、はるの目を見つめる。

やっと、ここまで近づけた。

これからも、ずっと俺の側にいてほしい。

だから……。

「佐竹はるさん、俺と結婚して下さい。」

はるは答えた。いつかと同じように、小さな声で

「よ、よろしくお願いします。」

ああ。末永くよろしくな、はる。

言葉と一緒に出てきたはるの涙を指でぬぐってやっていたら、周りから拍手が聞こえてきた。

・・・さすがに、これは恥ずかしいな・・・。

店を出たその足で、指輪を買いに行った。俺が勝手に買ってもよかつんだろうが、はると二人で決めたかった。

はるの希望を聞き出し、それを購入した。

シンプルなデザインだが、はるは気に入ったらしく俺の家に向かう車内で、じっとそれを眺めていた。

俺は、はるの薬指に俺と一緒に指輪がはめられているのを見てるだけで満足だった。

二人きりになると、久しぶりに会ったということもあり、はるに触れたくてしょうがなかった。

襲いそうになるのを、何とか理性で抑えた。

が、それも部屋に入るなり切れた。

そこからは余裕なく、はるをむさぼったこと以外覚えていない。

俺の全てではるがここにいることを確かめたかった。

はるは怯えながらも、抵抗をやめて、俺を受け止めてくれた。

とりあえず俺の欲望がおさまった頃には、はるは大分ぐったりしてた。

そんなはるを抱きしめていると、腕の中のはるがためらいながら

「あの：何でこんなに連絡なかったの：？」

と言った。無意識の上目遣いに反応する自分の体に苦笑しつつ、俺は会えなかった2ヶ月のことを話した。

俺の話を聞き終えた、はるは

「大変だったね・・・。」

と心をこめて言ってくれた。

ああ・・・やっとはるの側に帰って来れた。

「何がつらかったって、はるに会えないことが一番つらかった・・・。」

何度、真夜中の襲いに行こうと思ったか・・・。」

半分冗談、半分本気だった。

「襲ってもいいから会いに来てほしかったな・・・。」

はるがポツリとつぶやいた。

こんな言葉を聞ける日が、来るとは・・・っ！（感動）

「あのねっ」

今の自分の発言にはるが取り乱す。

いや、もう耳に永久に残すことにしたから取り消すことは不可能だぞ、はる。

はるがそう言ってくれるなら・・・

「わかった。これからは、ガンガン襲うことにする。」

楽しい新婚生活になりそうだ・・・。

照れくさいのか、下を向いたはるに、また愛しさが溢れる。

はるは俺を選んだ

あの日、眠るはるに誓った言葉

『誰よりもお前を愛し、誰よりも大切にする。』

だから、誰よりも俺を求めろ。

そうすれば、永久に俺はお前を愛するから。』

俺は、この誓いをこれから一生かけて果たしてみせる。

だから・・・

「はる。」

はるが顔をあげる。

頼むから

「ずっと一緒にいろ。」

命令するように言ったのは

「NO」は受け入れられないから。

はるが答える。

「よろしくお願いします!」

力強い言葉と見惚れるほどの笑顔で。

さよならに怯える君にゆるぎない絆をあげよう。

なにげない日常を君と生きていこう。

握った手は永遠に離さない。

俺の全てで、君をつなぎとめる

死が二人をわかつとしても

暖かく、愛しい春は何度でもやってくる。

そう信じて

ほら

今年も

春がきた。

— The End —

俺の春 春到来編（後書き）

読んで頂きありがとうございました！いきあたりばったりで出来た作品ですが、予想していた以上にたくさんの方に読んで頂けたこと、大変嬉しく思っております。

今後、機会があれば番外編として結婚式編や新婚編などを書いていきたいと思えます。気長にお待ちくださいませ。

最後に次回作予告を活動報告に載せております。よければ、引き続き読んでやって下さいな。

番外編 春を愛でる（前書き）

とある店長の独白です。短いですが、真面目に語っています。

番外編 春を愛でる

特別ではないけれど

変わらない場所を

君にあげる

初めて君を見たとき、迷子かと思った。

初めて会ったのは、そう雨の日だったね。

びしょぬれで立っているから、ひどく驚いたのを覚えてるよ。

「あの店員を応募してるって聞いて・・・。」

まさか、君みたいな若い子が来るとは思ってたよ。

呆氣にとられる私をよそに、パートさんたちが集まってきて、風邪をひいたらどうするんだいって感じで君は事務所に連れて行かれたね。

パートさんたちは、ひざ掛けで君を包み、暖かいお茶を君に差し出した。

パートさんたちに聞かれるまま、君は自分のことを話したね。

私が聞きたかったこと全部、聞いてくれて楽だったなあ・・・。

君の身の上を聞いたパートさんたちは、その時から保護者のような気持ちになったらしいよ。

『迷子のような君に、居場所を。』

私も含めてそこにいた全員が、言葉をかわすことなくそう決めたんだ。

それからは大変だったね。

人と接することに慣れていない君は、パートさんたちにたくさん怒られた。

優しさに溺れずに、ちゃんと自分で自分の場所を作ってほしかったから、パートさんたちも心を鬼にして怒ってたんだよ。私はそれができなくて、何度も怒られたけどね。

だって、ほら甘やかす方が楽じゃない。

でも、私なりに君との距離を測ってたんだよ？

近づきすぎず

遠すぎず

影で皆を見守ってる

お父さんみたいに、ね。

上手くできたかな？

パートさんたちと打ち解けると、君は料理を教わり始めたね。

家で試しに作って持ってきて、味見を何度頼まれたっけ。

おいしいって言う嬉しそうに笑う君を見て、娘を嫁にやりたくない父親の心境が理解できたよ。

パートさんたちも何か誇らしげだった。

でもね、皆わかった。

ずっとこのままじゃいられないって。

君の居場所は作ってあげられても

ずっと君の側にはいられない。

それは、私たちじゃだめだ。

強い意志を持って、ずっと君の側にいてくれる人じゃないとだめだから。

だから、それまで。

皆、君の側にいるよ。

家族ほどじゃないけど、他人よりは近い所に。

君の居場所はここにある。

だから、もう君は迷子じゃない。

皆、はるを愛してるよ。

そんな私たちの前に隙のない男が現れるのは、もう少し先のこと。

番外編 春を愛でる（後書き）

お読み頂きありがとうございました。何となく店長視点を書いてみました。私の中では割といい男なイメージなんですけど・・・。

番外編 春騒動（前書き）

第三者から見た彼。

番外編 春騒動

その日、僕は少し緊張していた。

僕のミスでありえないくらい仕事を増やしてしまった先輩が出張から戻り、今日出社する。

ちゃんとお礼を言う暇さえなく先輩は出張に行ってしまったから、今日こそちゃんと謝って感謝の気持ちを伝えるんだ。

そんなことでなんで緊張するのかって？

それは、先輩の人柄にある。

決して先輩が怖い人ってわけじゃない。

むしろ、僕のミスの後処理を何も言わずやってくれるぐらい面倒見のいい優しい人だ。

だけど、先輩のまとう隙のないピシッとした雰囲気と何があってもほとんど変化しない表情のせいで、どうしても緊張してしまう。

先輩の前に立つと自然と背筋が伸びる。嫌な緊張感ではないんだけど・・・。

とても仕事ができ、部下だけじゃなく上司にも頼られてる先輩に僕は憧れてる。

そんな先輩に認められたいという思いもあって、変に力が入ってしまふのだ。

でも、今日はしっかりお礼を言うぞ！

尾形先輩に！！

そんなわけで、僕はいつもより早く出社して自分のデスクで尾形先輩が来るのを待っていた。

尾形先輩は、いつも皆が来るより先に入社して仕事の準備をする。人も少ないし、ゆっくり話せるだろう。

そう思っていたんだけど……。

いくら待っても先輩は来なかった。

結局、先輩が出社したのは始業時間ギリギリだった。

めずらしい……。出張でお疲れなのかもしれないな。

それでも、髪型もスーツもピシっとしてるのはさすがだけど。

できたら先輩とゆっくり話がしたかったんだけど、しょうがない。

お礼を言うのは早いほうがいいだろうし、何より早くこの緊張感から解放されたかった。

仕事の準備をする先輩のデスクに近寄り、一回深呼吸をしてから話しかける。

「おはようございます先輩っ！あのっ！この前は……。」

何度も頭の中で練習した言葉は結局でてこなかった。

先輩の左手の薬指に光る指輪を見つけたから。

ええええええ！？

先輩の薬指が起こした混乱は僕一人にとどまらず、その日のうちに会社中に広がった。

それはしょうがないことだと僕は思う。
だって、すぐくもてるのに、どんな女性が告白しても顔色一つ変えず断ってきたあの先輩が急に指輪なんかつけてきたんだから。
浮いた話なんてほとんどなかったし、どんな女性に対しても、態度も表情も変えないあの先輩が指輪!!
一体、先輩に何があったんだ・・・??
ていうか、相手は誰なんだ???

指輪を見た人間が思うことは、ほとんど一緒だったけどそれを先輩に直接尋ねる勇気をもったものはいなかった。女性社員は集まってひそひそ話をしてるし、男性社員は気になりながらも普通に仕事をしてるふりをしてる。僕もその一人だ。
当事者である先輩はいつもと同じようにもくもくと仕事してるし。そんな妙な状態のまま時間は流れていった。
が、そんな状態を壊したのも先輩だった。

「佐々木。」

っ!!先輩に呼ばれたっ!?

「はいっ!!」

いきおいよく立ち上がる。

「今度の会議の打ち合わせに行くぞ。」

げっもう、そんな時間!?

「はいっ!!」

先輩の指輪に気をとられて、仕事のことを完全に忘れてた・・・。
ダメだなあ・・・。

たくさんの書類を取り出し、先輩を追いかける。

追いつき横を見れば、いつも通り隙のない先輩がいる。
まわりがこれだけ騒いでも全く動じていない先輩のもつ静けさが僕
を落ち着かせた。
今なら……

「先輩……それ……。」
視線で指輪をさす。

「ん？ ああ、これか。」

先輩が指輪を見る。
すると、先輩はゆっくりと嬉しそうに微笑んだ。

ああ、本当に大切な人ができたんですね、先輩。
それなら、あなたを尊敬する後輩として心から祝福したい。
頭の中で練習なんかしなくても、今度はちゃんと言えた。

「先輩、おめでとうございます。」

僕のその言葉に先輩は一瞬驚いた顔をしてから

「ああ、ありがとう。」

と笑って言った。

尊敬するあなたとあなたが選んだ人に幸福を。

いつかあなたにそんな顔をさせる人に会わせて下さいね、先輩。

番外編 春騒動（後書き）

読んで頂きありがとうございます。彼の視点で書くつもりと熱い人なんです、まわりから見ただ彼はこんな人です。基本は無表情。頼りになるけどちょっと近寄りがたいお人です。不定期ですが「ネガティブな春」まだ書くつもりですので、気長にお付き合いくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3379r/>

ネガティブな春

2011年4月19日15時09分発行